

神社と獺友会

Jinja to ryoyukai

語り手 袖垣吉治

聞き手 山本真紀

企画:高山市

取材日:令和4年1月18日

宮司への道

私は、上宝生まれの上宝育ちです。蔵柱中学校を卒業してから、千島町にある斐太実業高等学校を出て、昭和43年に「ホテル穂高」に入りました。そして、2年後の昭和45年に「新穂高ロープウェイ」が出来たのを機に、内部の人事異動で「新穂高ロープウェイ」勤務になったんです。「新穂高ロープウェイ」では、平成8年頃から2階建てのロープウェイにするべきだという話が出始め、平成10年7月14日に新しいロープウェイに付け替えることになりました。

神社の宮司は、元々、私の父がやっていたんです。私自身、若い頃は宮司をやる気がなかったんです。前々から、父に、「せっかくやで、宮司の資格を取りに行っちゃい」と言われていたんですが、仕事が忙しくて、なかなかそんな時間の余裕はない。宮司になる為の講習は、ちょうどロープウェイの仕事が忙しい8月に行われるものですから、当然、休めません。ところが、平成10年に新しいロープウェイへの付け替え工事をする事になった関係で、たまたま8月に休暇をもらえたんです。そこで、その休みを利用して神職の資格を取りに行きました。結局、平成10年、11年、12年の3年に渡り、8月に講習に行き、神職の資格を取りまして、平成14年から宮司に次ぐ位の「禰宜」をしとったんですね。そのうち父も年老いて、だんだんだんだん弱っていく。これはもう父が宮司をやるのは無理だと思ひまして、「わかった、俺が宮司をやる」ってことで、私が宮司になりました。そんな経緯で、平成25年から、堂殿神社をはじめ、複数の神社の宮司を務めています。

コロナ禍の中で

今はもう、どの地域も過疎化です。今からの課題は、どうやって神社を維持していくかってことだね。とにかく人がいなくて、神社を維持できないね。どこの神社でも同じです。ましてや今、コロナでしょ。「もうコロナやで、辞めよう」と全部辞めていきよるんです。コロナだから辞めることは仕方ないんです。でも、神社本庁としては、神事だけはやってほしい気持ちがある。「直会」なんかは、持ち帰りでもいいが、とにかく神事だけはしっかりやってほしいと言いますね。換気をして、密にならないようにコロナ対策をして、お参りしていただくのが本来であって、お参りの人が多いから神事をやらないとか、多いからやるというのは関係ないんです。だから、今、ほとんどの神社は消毒液を用意して、密にならないような対策をして、神事をやっています。やっぱり、どうしても神事だけはやっていかないとね。

それぞれの解釈の仕方かもしれませんが、コロナやであれもこれもやらんっていう神社もあれば、コロナであってなんでもあっても神事だけ



袖垣吉治

昭和24年4月21日生

プロフィール

<学歴>

昭和43年3月 斐太実業高等学校卒業

<職歴>

昭和43年4月 奥飛観光開発(株)入社

平成25年6月 奥飛観光開発(株)定年退職

<役職>

岐阜県飛騨側登山道等維持連絡協議会会長

飛騨獺友会 上宝支部長

岐阜県神社庁 吉城郡支部 副支部長

はちゃんとやろうっていう神社もあります。その辺は、宮司と地域の総代長との話し合いなんですね。その話し合いがしっかりできている神社は、神事だけはしっかりやっています。

高山祭のトップは日枝神社なんです。その例祭が、4月の14、15日。日枝神社の例祭をやるかやらんか、どういうやり方をするかが、その年の祭りの基準になります。その後の19日は古川、23、24日は神岡と例祭が続きます。末端の神社まで、その年の祭りのやり方は、日枝神社の対応次第になってきます。私たち宮司は、岐阜県神社庁から言われている「神事は、やってくださいよ」という指導しかできない。それ以上、これは、やる、やらないということは出来ません。例えば、高山祭でコロナの集団感染が起きて、クラスターになったという情報がどんとマスコミに流れたら、かなりのイメージダウンになります。そうすると、来年もその次の年も観光客が減ってしまいます。その辺の兼ね合いは難しいですね。だから、どの神社も一生懸命協議しています。飛騨は、4月の終わり頃から5月にかけて例祭をするところが多いんです。それを今、どうするかが一番の悩みです。どうしたら良いか、細かいところまで悩みますよ。



例祭の様子

過疎化がもたらす課題

過疎化は、神社にとって最も大きな問題ですね。これから、どうやって神社を維持していくかです。元々、氏子が100軒も200軒もある神社もありますが、一番多い時期に30軒だった氏子が10軒や5軒になった場合にどう神社を維持していくのかですよ。冬、雪がたくさん降る。今は、神社の屋根の雪降ろしをしたくても、氏子の皆さんに頼むことが出来ず、業者に外注しています。お金はかかってくるけど、外注に出すより仕方ないんです。ところが、今、高山市に屋根の雪降ろしをしてくれる業者さんは、道路の除雪作業もやっているところが多いんです。そうすると、道路の雪をかくのに精一杯で、屋根の雪降ろしまで手が回らず、どんどんどんどん後回し。そんなわけで、みんな、弱った弱ったということになります。

氏子が15軒から20軒前後というところが増えてきました。そうすると20軒前後の氏子の中でも、若い人達と暮らしているのは、だいたい2～3軒くらいかな。地域に仕事がないから、若い人達はやっぱりどうしても他所に行ってしまう。氏子は減るが、お金は今までどおりに出さなくてはならん。当然、負担は増えます。

神社庁も危惧していますが、一番大きな課題は、過疎化神社をこの先、どう維持していくかってことです。実際に、飛騨市の宮川地区などでは、隣の地区の神様をこちらの地区の神社に移す合祀を行っています。ところが、上宝地区の場合、Aという神社とBという神社で合祀をしようとした場合、大きな問題が出てきます。それぞれの神社が莫大な広さの山林を財産として所有しているんです。そうすると、その山林も神様と一緒にどちらかの神社に移すことになります。結果、所有した方の神社は、



山林の管理もしなくてはならん。現金はない。だが、山はある。神様を預けた神社を壊す費用もない。そうなると、誰も喜ぶ者がいません。そして、やっぱり年をとった人からは、「先祖から神様を預かってきとるもんで私の目の黒いうちは、私の生きとるうちは、合祀はやめてよ」と泣きつかれると、合祀を進めておった話もちっとも進まなくなる。本当に難しい。市町村合併よりも難しいな。

神岡辺りの氏子が2～3軒しかない地区では、神様を小さな社に移して、天気の良い日に神事だけをやっているというところもあります。今はもう、昔と同じことは絶対できん。この先、この神社を若い人達がどうやったら守っていつてくれるかなと考え、負担の少ないやり方をしないと続けられない。本当に問題だらけです。

岐阜県の登録神社はだいたい 3300 社ほどあると言われています。それに対して、宮司といわれる神職は 550 名ほどしかいません。だから、宮司ひとりで6社、10社は当たり前の世界です。岐阜の方には、ひとりで40社、50社くらいを持っている宮司もいます。本当に人がいない。かと言って、合祀もできない。だけど、登録神社は残っとるもんですから、どうにもできないんです。人が少なくなるってことは、そういうことなんです。昔は、神職は、タクシーで送迎がありましたが、今は、自分の車で行って、自分で帰って来る時代ですね。時代が違います。

今後、若い人がいなくなった時、これからますますどうするかですね。なかなか若い人に神職の資格を取ってもらえん。人がいないところにもってきて、神職だけで食べていくことができない。実際に宮司だけで生計を立てるのは難しいね。上宝地区には、私を含めて5名の神職がいるんですが、現在、最も若い神職でも45歳くらい。その次に若い人で、58歳くらいかな。もう、彼らに託すしかないです。本当に後継者がいないんです。皆さんどんどん年をとっていきます。これも大きな問題です。神宮大麻というお札の頒布数も減ってきましたね。伊勢神宮の遷宮には、半端な金額じゃない莫大なお金がかかるんです。昭和27年以前は、遷宮の費用は、国が補填していましたが、終戦後は、神道も宗教であるということになり、国は一切お金を出してくれなくなりました。現在は、第63回遷宮組織委員会を立ち上げ、全国からお金を集めているところです。岐阜支部の神宮大麻はだいたい2トントラック1杯分くらいです。吉城郡支部の分で軽トラック1杯分くらいです。神宮大麻というお札が始まって150年ですかね。この神宮大麻のお金が、遷宮の費用に充てられるわけです。

遷宮は、20年に1度と決められているんです。遷宮の際、建物だけではなく何万点という物品も用意します。それぞれの品物は、1300年前と全く同じ材質を用い、1ミリの狂いもあってはいけません。そこだけは、絶対に曲げてはならないんです。伊勢神宮正殿では、釘は1本も使わずに建てられます。全て、匠の技で20年間持つ建物を作ります。一切の狂いもないように、隣で1度仮組みをしてから建て始めます。昔の人は、20歳で大工に弟子として丁稚奉公に入り、40歳の時に概ね中間



祭りの様子



くらいのレベルで社を建てる。60歳で棟梁になって社を建てる。このように伝統ある技術の伝承をしていく為には、20年に1度の遷宮が必要なんでしょうね。

子ども天神祭り

本郷地区（本郷、長倉、蔵柱）には、明治以降100年以上続いている「子ども天神祭り」があり、毎年、4月3日に行っています。天神様というのは、学問の神様である菅原道真公です。勉強ができますようにっていう願いを込めたお祭りを子ども達が主体としてやっています。この祭りは、地域ごとにやりますね。雪割りからが、子どもの仕事。春休みになったら、もう、とにかく、雪を割って、何が何でも団子撒きの準備をします。例祭は、5月3日頃なので、例祭に先駆けた春を告げるお祭りです。私らの頃は、小学校3年生にならないと、仲間に入れてもらえなかったんですが、今は、人がおらんもんで、小学校1年生から中学生の子どもで「子ども天神祭り」をやっていますよ。最近、子どもの数が減って、神社神楽の演奏も難しくなりました。実は、神社神楽も神社によって少しずつ違うんです。それで、神社ごとに子ども達が演奏した神社神楽を録音して、CD化してもらっているところです。

「子ども天神祭り」では、高学年の子どもが全部準備するんです。そして、いろいろなことを低学年の子どもに教える。子ども達だけで、団子撒きまで、全てやっています。大人は一切、口出ししないんです。大人は、団子を拾いに行くだけです。どこでどんな風に団子を撒くかも全部、子ども達が考えます。女の子は、景品の準備などもしますし、例祭の時は、稚児さんと舞をやります。ちゃんと会計係がおってね。祭りでいただいた寸志を集めて、会計処理をします。さらに、その中から、子ども達にお菓子なんかを配るなどいろいろなことをします。本当に子どもが子どもだけで完結する祭りです。

極端なことを言えば、中学生くらいになると、大人と同じようなことをしとるんやさな。元々は、「少年団」っていうんやけど、その中の団長は、「子ども天神祭り」を成功させて、次の代に渡すっていう暗黙のルールみたいなものがありましたね。この活動の中で、高学年の子どもが低学年の子どもへの伝え方を覚えるんやね。やっぱり、学年が上がるに従って、下の学年に伝えていかんとならんっていう気持ちが出てきます。どういう風に下の子に伝えていくと良いか、どう伝えていくと良いかを考えて、次の代に伝えていくんですね。これは、伝統の伝え方としては、すごいことだと思います。これが、コロナのせいで、2年も3年も間があくと、伝統を伝えるのが厳しくなるね。

コロナで今年も祭りが出来ないとすると、3年連続やらないことになります。3年というと、中学校に入学して卒業する間です。実際問題、舞をやらないまま、舞のメンバーから外れてしまいますね。実は、それが、ものすごい問題なんです。男の子もいろんな役を一切しないまま大きくなります。小学生の時は、行列について「かんかこかん」をやります。



祭りの様子 獅子舞

中学生になったら、あれをやる、これをやるって役割が決まっておったのに、何もしないまま高校生になってしまう。いろんな役割の経験をしていないから、記憶には、何にも残りません。もちろん、下の子に伝えたり教えたりすることもできませんよね。そうやもんで、色々、危惧しています。

伝承、そして工夫

神社庁の吉城郡支部では、令和 2 年に飛騨農協国府支店の 2 階でそれぞれの神社で「浦安の舞」を教えてみえる方を 30 人くらい集めて、みんなで練習しました。例え、今年もコロナの影響で、子ども達に舞を教えることが出来なくても、来年以降も、舞を忘れず教え続けられるようにしたいんです。とにかく、舞を残したいんです。体で覚えたことは残りますからね。子ども達に舞を教える人がわからんようになってしまうと、舞の伝承は難しいですからね。神社は、伝統を守っていくだけのところですから。神事やって伝統を守ればそれでいいんです。

私は、何としても、その神社に伝わる神楽を残したいんです。神社庁から、神前神楽の CD を手に入れることができます。でも、神社ごとにそれぞれ違いがあるので、それを伝統文化として残したいんです。人不足で、神楽ができないところは、CD 化するなどの工夫をして、何が何でも続けていきたいですよ。子どもが足りないから「無し」ってわけには、いかんと思うんです。年寄りがひとりでもおる所は、やっぱり、そういうことをなるべく続けていきたい。

今、ほとんどの神社では、正座でお参りする「座礼」ではなくなってきました。足腰が痛くて正座できない人は、椅子でお参りされることが多いです。神社では、なんとか、たくさんの方にお参りしてもらえるように椅子を用意しました。そのおかげで、一時期よりも、お参りされる方が増えました。これも時代に合わせた工夫です。そうしていかないと、続きません。なにしろ、人がいないんですから。

とにかく、できることは、何であろうがやる。とにかく、若い人達に極力、負担をかけないことが大切なんです。「いや、違うんや」「昔はこうやったんや」「この通りにやらんと駄目なんや」と押し付けるんじゃなくて、今の時代にマッチした維持の仕方をしていかないと、これから先、誰も維持してくれない。それをやっぱり、常に思ってやっていかないと。今の若い人達は、お金の問題ももちろんあるかもしれんけど、普請だからといって、毎週、神社の作業に出るわけにいかないですよ。[1 年間に 5 日は、神社の普請に行かへん]って、押し付けてしまうと維持ができないの。そうではなくて、「なんとか維持できるようになんとかしようよ」って地域の皆さんと相談しながら進めています。時代に合った形で、なるべく負担にならないように。でも、伝統は残したい。



令和 2 年 舞の練習



猟友会の現状

私は、猟友会の会長も務めています。人がいなくて、代わるに代われず 20 年間、会長をやっています。元々、猟友会は、奥飛騨と上宝のふたつの支部があって、一番多い頃は、各支部それぞれ 130 人くらいずつ銃の所持者がいました。ところが、銃規制がどんどん変わって厳しくなるにつれて、どんどん辞めていきました。銃の事件や事故が起こる度に法律を変えていくわけですね。「いや、そのやり方が悪いから、駄目なんだ、こうした方が良い」ってことで、どんどん銃の規制を厳しく変えていった。その度に、会員は、「こんなことやっとなるか」「義務やって言われても俺はやらんぞ」って辞めていき、現在、猟友会の会員は、上宝支部で 9 名、奥飛騨温泉郷で 9 名、合計 18 名しかいません。

元々、私は、熊を獲りたくて、狩猟を始めたんです。昔は、熊一頭で 100 万円くらいのお金になりましたが、今は、ほとんどお金になりません。ほぼ 0 円なんですわ。昔は、「熊の胆」といって、胆のうが漢方薬として流通していて、60～70 万くらいで高額取引されていました。しかし、今は、ドラッグストアに行けば、しっかり効能の書かれた薬が「熊の胆」よりもかなり安く売られていますから、わざわざ、効能のはっきりしない高額の「熊の胆」を欲しが人はほとんどいなくなりましたね。昔は、鞣した熊の毛皮も 10～20 万円くらいで売れました。熊の剥製もみんな欲しがらず、ほとんど買い手がいません。あまりお金にもならないのに、一か八かで命を懸けて、熊を獲りにいけないです。昔は、熊一頭が、100 万円になるから、危険を承知で熊を撃ちに行きましたが、今は、お金にならないからね。こんな理由で、冬の間も趣味で鉄砲を撃ちに行く人なんてほとんどいなくなりました。今は、ほとんどが有害駆除です。

昔の人は、「上宝では、1 年間に熊を 20 頭獲れよ、獲らんとお前ら大変なことになるんやぞ」とずっと言われてきました。それは、上宝で 20 頭熊を獲れば、生態系のバランスが良くなって、人里の方に熊が降りて来んようになるよってことです。そういう理にかなったシステムでした。しかし、今は、熊が出てからの駆除でしょ。

狩猟期間は冬です。11 月 15 日から 2 月 15 日までの狩猟期間は、熊でも何でも獲れる獣は獲っても良いんです。しかし、狩猟期間じゃない時に熊を駆除しても、一銭にもならんわけです。高山市は、「はい、ありがとうございます、埋設してください」でおしまいです。支所の職員が熊の写真を撮って、埋設です。夏の熊は、肉も取らん、胆のうも取らん、毛皮も取らずにただ埋設ですよ。だから、何にもならん。もったいないけど、熊は有害やで、仕方ないね。

有害鳥獣駆除の必要性

では、次の時代は、どうなるかというと、やはり政府も考えていますね。この高齢化社会では、もう、地域の猟友会だけでは、無理なんです。建設関係等の業者さんに多額の金額でビジネスとして渡すべきではないかというのが、環境省の考え方です。もうすでに会社を立ち上げて、狩猟



捕獲した熊



の免許を持った人を4～5人集めて来て、良い銃を持たせて、登録させて、全国へ駆除に行くっていう時代になりつつあります。

今、地元の猟友会の人達に頼むで、狩猟を辞めないでって言うのは、有害捕獲の為です。なんとしても、有害捕獲だけは続けていかないと、地域がえらいことなる。現に、私の住んでいる蔵柱には、トマトハウスがたくさんあります。大西農園という会社組織があってトマトハウスを20～30棟を使ったトマト栽培をしています。トマトの受粉する為にマルハナバチを使うとその蜜を狙って熊が来るので、とても危険なんです。やっぱり、近くに熊を撃てる人がいることは、大切な事です。

上宝の長倉という地域では、夏はトマト、秋は林檎を作って、熊や猪、猿、鹿などの被害があるんです。そこで、被害対策組織を作り、とても大きな檻を入れたおかげもあり、現在、順調に有害鳥獣の駆除は進んでいますね。一時期からみると相当、害獣の数は減りました。実は、高山市の場合、檻は全て市が支給してくれます。この檻も高山市が120万円くらいかけて作ってくれました。しかし、ただ、檻を置いておけばいいわけじゃないんですよ。檻を有効的に使うには、やっぱり、住民が獣を獲らないとね。一番の問題は、獣害です。今は、全て有害鳥獣駆除隊員としてやっているだけで、趣味で狩猟をしている人はほとんどいません。かなりの危険が伴うのに、お金にもなりませんから。ここ数年の間も、有害駆除中に、熊や猪にやられて負傷した人も何人もいます。こんな理由もあり、本当に有害捕獲が厳しくなってきた。これは、高山市全体にも言えます。だから、高山市も農務課が主体となって、「なんとかこのまま、猟友会を維持していきたいもんで、みなさんお願いしますよ」って流れの中で、銃の免許を取る人には、50万円の補助金を出すことになっています。だけど、補助金だけもらっても、仕事も休まないといけな。申請もしなくては行けない。なかなか簡単ではないですよ。その他にも、熊3万円、日本猿3万円、猪2万3千円という報奨金制度もあります。

世の中には、有害駆除は、動物が可哀そうだという人もいますからね。本当に世の中、難しいです。

伝えることの大切さ

これからもね、当然、行政が主体として有害捕獲をやっていくんだけど、こういう難しい問題がいっぱいある中で、法律で、あそこで発砲しては駄目、ここも駄目って言うもんで、どえらい難しい。民家に獣が出るから、駆除するのに民家や道路で発砲しては駄目ってなると本当に困る。やもんで、私達もなるべく銃を使わずに、「電気止め刺し」という道具を使うようにしています。これなら警察の許可はいらないし、規制がないんです。「電気止め刺し」は、火薬を使わず感電させてとどめを刺せますから。今は、これが、一番良くなって思っています。これも、時代の流れですね。とにかく、いろんな事を若い人、次の世代にどう引き継ぐかですよ。獲った獣は、私がばらして、そのやり方を下の世代の人に教えています。やっぱり、野生生物は、処理の仕方では食べれるかどうかが決まってきます。



捕獲した鹿



捕獲した猪



どのように血抜きをするか、いつするか、どこでするかで全く変わってきますね。きちっと血抜きの処理をすれば、熊や猪は臭いから食べられないということはありません。だから、私は、なるべく若い人に解体の仕方を見せてやって、手伝わせて、帰りに肉を持たせてやります。こうやって、処理の仕方の伝承をしているわけです。

昭和の初めには、飛騨に猪はいませんでしたね。猪が増えてきたのは、30年ほど前くらいかな。なんだか突然、増えてきた感じです。ただ、明治時代には、猪のことを書いた書物が残っているので、明治の頃に猪はいたのだと思いますが、病気でいなくなったのか、理由はわかりませんが、昭和の初期に猪はいなかったんです。豚熱が流行して、もうすでに3年も4年も経ちました。岐阜県が豚熱の発祥地やもんで、今でも、「ワクチンを撒きなさいよ」「猪を捕獲したら血液を出してくださいよ」って言われてます。猪がワクチンを食ったのかわからんもんで、それを今、一生懸命調べておるところです。勿論、私らも、自分で獲った猪の血液を検疫に出してますよ。

猟友会は、昔は、鉄砲撃ちの集まりでしたけど、今は、いろんな役割がありすぎやな。岐阜県から頼まれて、豚コレラのワクチン散布もやる。頼りにされて本当にありがたいことなんやが、ちょっと違う方向にいておる気がする。

全てのいろんなことを若い人に伝えていくしかないんやさ。とにかく、この先の維持が心配やな。負担になることをなるべく減らして、なんとかみんなで維持していけるようにしていかならん。何にしてもそうや。猟友会にしたってね、負担ばかりで、面白くないんやさ。やっぱり、面白くないとな。面白かった、良かった、獲物を獲って美味しかったって経験がないと、次、やりたくないんやさな。私らは、先輩からそうやって引き継いできたから、まだ、いいけど。若い人は、ね。



猪の処理前